

平成 27 年度「オリンピック・パラリンピック教育モデル推進校」 事業実施報告書

- I スポーツへの誘い 自己肯定感の醸成
 II 障害者や高齢者への理解 共生社会の形成
 III スポーツへの関心や競技力向上 スポーツボランティアへの参画
 IV オリンピック・パラリンピックに向けた京都の伝統や文化等の発信
 V 児童生徒オリンピック、パラリンピックを通じた国際理解教育の推進

実践事業	【 主としてV, IV 】	I～Vを記入して下さい。	
学校名	京都市立南太秦小学校	全校生徒数	303名
実践学年、部、講座等	第6学年を主体に、すべての学年（育成学級を含む）		
目 標 (ねらい)	オリंपィズムの観点(○印) <重複可>	友情 (○)	卓越 () 尊重 (○)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多様な言語・文化圏から講師を招き、直接児童とのふれあいの場を設けることで、「“ちがい”を尊重し認め合う」「“同じ”に感動し喜び合う」実践的態度の素地を養う。 ・ 国際貢献の視野を授業に取り入れることにより、「知る」だけに終わらず、自分にできることは何かを考えさせる。 ・ 日本（京都）のよさやおもてなしの心について体験を通して学び、発信できるようにする。 		
実践内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ P I C N I K事業等を活用し、海外からの留学生を招き、体験的に外国の文化・生活習慣等にふれる。 ※H27.10～ 1年（フィンランド）2年（モンゴル）3年（ハンガリー）4年（トルコ）5年（ウクライナ）6年（フランス・ペルー） ・ J I C A関西より、青年海外協力隊OB・OGを招き、世界の現状と国際貢献の在り方について体験的に学ぶ。（6年）また、大阪ユニセフ協会より講師を招き、世界の子ども達の現状について体験的に学ぶ。（5・6年） ・ 京都の伝統的文化財を訪問し、既成のガイドブック等に頼らず自らの視点でその良さを発見し、まとめて、外国の人々に発信する。 		
実施上の留意点等	<ul style="list-style-type: none"> ・ できるだけ多様な言語・文化圏から講師を招聘することができるよう関係機関と調整する。また、6年生では1年間にすべての大陸を ※～H27.9 1年（韓国）2年（香港）3年（韓国）4年（ベトナム）5年（モンゴル）6年（ベトナム・ガボン・インド・ラオス・ハンガリー） ・ 国際交流では、座学に終わることがないように講師と打合せを行い、歌や遊び、踊り、造形活動等体験活動を行うようにする。 ・ 交流授業の後には必ず児童ふりかえりを行い、また教師もレポートを作成し事業成果を蓄積していく。 		

1 児童のふりかえりシートより（抜粋）

「わたしたちが、外国の方々との交流を通して学んだことは、知ることの大切さとコミュニケーションの大切さです。言葉は通じなくても、分かり合えるし、自然と笑顔になり合えます。事実を知れば、思い込みや偏見がなくなり、随分とイメージが変わります。わたしたちは、国が異なっても同じ人間であることには変わりがない、と改めて感じることができました。」

「今日お話を聞いたセネガルという国は、日本と比べて解決しなければならない問題はあるけれど、人と人とのつながりを大切にしているという意味では心の豊かな国だと思いました。わたしもJICAの活動に入って、国際貢献をしていきたいと思いました。」

「ぼくは、外国の方々が自分の国を誇らしく紹介される姿を見て、日本や京都のよさをもっともっと知りたくなりました。あんなふうに胸をはって伝えることのできる伝統文化をぼくも肌で感じたいです。」

※ 多くの児童が上記のような感想をもっている。本校がねらうオリビズムの観点（友情・尊重）から見ても、好ましい心情が育っていると考えている。

2 民族の文化にふれる集いに出演

平成28年1月30日（土）、第24回同集会にて6年生代表児童10名が実践発表を行った。児童は、各交流の様子やそこの発見・気づきを大勢の観衆の前で伝えた。相手に直接会うことでお互いを隔てる壁は一気に低くなり、分かり合うことができるということや、外国の人々におもてなしの心で接するためには、もっと母国・日本のことを知らなければならないということ等、学習の成果を報告していた。



フランスの家庭菓子づくり



JICAの活動を知る



ガボンの遊びを体験



民族衣装の折り紙を教わる（1年）



京都のよさを発見するラリー

主な成果
(分析結果)

主な課題等

- 外国人講師を招いての国際交流授業は、「知らないことに会う」というのが第一義となるので、受け身の学習になりがちである。高学年では事前学習を行って自身の課題をもち、問題解決的な学習となるよう計画する必要がある。
- 双方向の理解を成立させるためには、本校児童が我が国の伝統文化をよく知り誇りをもって伝えられる態度を育て、外国人に「日本の文化を発信する」活動が不可欠である。今後は、この視点をもったカリキュラムを策定しなければならないと考える。

【報告書作成にあたっての留意事項】

※1…A4 1～2ページ程度で作成をお願いします。

※2…表記の仕方について

(1) 字体（フォント）等について

本文は「HG丸ゴシックM-PRO」、12ポイントのサイズで記入してください。

(2) 項目の表記について

項目を細別する時には、以下の順序で見出し記号を記入してください。

【項目表記の順序】		【表記例】
〔見出し記号〕	〔文字サイズ〕	
1	←全角・15ポイント	1 体育系研究発表会での取組
(1)	←半角・12ポイント	(1)「研究調査」の実施
ア	←全角・12ポイント	本校では、……（略）……に取り組んだ。
(ア)	←半角・12ポイント	ア スポーツボランティア活動について
2		イ パラリンピック種目について
(1)		…
ア		

※3…児童・生徒が活動している様子を写した写真（3～5枚）も、貼り付けてください。
（ただし、写真掲載に係る本人への事前許可は、各校にて御対応願います。）

※4…取り入れた教材等があれば、記入してください。

※5…主な成果（分析結果）については、感想文の抜粋やアンケート集計等を活用していただいてもかまいません。

※6…オリンピズム（「友情」「卓越」「尊重」）を踏まえた教育活動として、どのような成果が見られたかを必ず記入してください。